

---

# せいていさんがんばって！

えいせん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

せいていさんがんばって！

### 【著者名】

Z5694Z

### 【作者名】

えいせん

### 【あらすじ】

その男、転生する。帝王の力をその身に宿し。その女、前進する。哀しみを背中に背負い。その者、渴望する。このぬくもりと、あの『愛』を。これは、格闘ゲームの素晴らしい話を説くお話（嘘）。これは、『帝王』の話。

## ハニカムワード（前書き）

何一つ考えてないこの小説を開いてくれてありがとう！  
楽しんでもらいたりいいなー！

## ついおつー

くそつ！

一体どうなつてやがるんだよおい！

いつものように村に『お邪魔』して食いもんを貰つて・・・あわ  
よくば女も頂こうかなんて俺達は思つてた。

なのに・・・これは一体どういうことなんだ！？

「何やってんだよお前らーこんな奴らにてこずりやがつてー..  
む、無理だよアーチー！」いつら、いつもと違つ！

村人達が俺達に抵抗してきたことなんていいくらでもある。  
だけど、俺達が今まで生きてこれたのはそんな奴らを力でねじ伏  
せて來たからだ。

「くそー!?なんだよー!!」う、うわああああああつーーー

また一人、仲間が死んだ。

「俺達の村に入つてきやがつてー死んでしまえ!  
「な、なんなんだよー！」

純粹な強さで言えば俺達が確實に強いだろう。

俺達は賊だ。

俺達の方が圧倒的に経験を積んでいる。

村人達の中では今まで人を殺したことすらない奴だつて少なくな  
いだろう。

なのに、俺達が押されている。

「ハアアアツー！」

「ぐえつ」

一人、俺達の誰よりも強い女がいる。  
腰まで届く紅い髪。  
俺達と大差ないほどの長身で、鋭い目。  
力強い印象を与えるその風貌で、俺の仲間を次々となぎ倒していく。

この女の槍によつて俺の仲間は何人も死んでいったが、この女に  
俺達が劣勢になるほどの力は無い、だろう。  
どれだけ強かろうが、所詮一人で出来ることには限りがある。  
俺達がここまで劣勢に立たされているのは恐らく、たった一つのこと。  
・・・俺達は、村人達に恐怖を感じている。

この村の雰囲気が、異質だった。

村人の一人を殺す。

そうすると、どんな村でも足が震え、逃げ出す奴が居た。

なのに・・・この村はどうだー？

怒りに顔を歪ませて、次から次に突っ込んできた。

片腕を失くせば、もう片方の腕で。

両足を失くせば、両腕で首を締めあげて。

両腕を失くせば、その体で仲間の壁になり。

正気の沙汰じゃねえ！

足が震える？

震えているのは俺達の方だ！

俺達は人間だ。

人間ってやつは、恐怖って感情がある。

人を殺す恐怖ってやつは、俺達だって感じてる。

それを俺達は殺し続けることで、感じないよう人に思わせているんだ。

それでも、死ぬ恐怖つてもんは誤魔化そつて思つても出来るもんじやない。

出来たらもうそれは人間じゃない。

・・・鬼だ。

こいつらは人間なのか？

傷つくことを躊躇わず、自分が戦えないと悟ると仲間のために命を張り。

これが、ただの村人だつていうのか！？

村『人』なのか！？

あり得ない、人間の出来る事じやない！

こいつらは、まるで・・・！

「ヒツ・・・！？」

なんだ、この女・・・

肩で揃えられた銀の髪。

さつきの女よりは小さいだろうが、すらりとした体。

その体を、漆黒の服で包む、絶世の美女と呼ぶに相応しい容姿を持つた女は、防具の一つも付けずに、しつしつ歩いて来る。

見ようによつては天使が降り立つたよつにも見えるかもしれないが、俺には悪魔にしか見えなかつた。

殺氣の一つも感じられないその女の目には、俺たちなど視界に入つてすらいなかつた。

「俺達には帝王様がついているんだ！負けるはずがないんだ！」  
「何？ 帝王だと！？」

帝王。

そうか、こいつが帝王か。

ということは、あの女は『陥陣営』か。

たつた一人で賊を潰してまわつていると聞いたことはあるが・・・

この村に居やがつたか。

ツイてねえ・・・ツイてねえが、二人さえ潰せればこの村の奴らだつて、ビビつて逃げ

「ふむ。・・・貴様ら、かかるべくがいい」

目が、あつた。

たつたそれだけで・・・俺は、殺された。

格が、違う。

足が、手が、動かない。

凛としたその声が俺の体を侵食していく。

圧倒的な力の差を感じ、俺の体は震えるとこりとすら放棄した  
ようだ。

「こぬのならこちから行くぞー。」

物凄い速さでこちらに近づいてくる姿をなんとか目で捉えるが、  
体は一向に動かない。

その手で道を阻む仲間を蹴散らしていく。

それを見て俺の頭は警告を全身に伝えていくが、肝心の体は反応  
すら返してくれない。

気がつけば、俺は血を吐いていた。

痛みすら感じずに、ただその不快感だけを認識して、急に意識が  
遠のいていく。

ツイてねえ。

村人が異常だったのでは無かった。

この女の、帝王の霸気が異質だったのだ。

・・・本当に、ツイてねえ。

俺は、倒れるという最後の仕事のためにひやく生き返った体に  
鞭を打ち、後ろを向いた。

自分を殺した相手と思えないほどに美しい『帝王』の背には、何  
故か哀しい漢が視えた気がした。

## ついでに（後書き）

「うちの帝王はエボタンカラーです。  
あなたの帝王は、何カラーニー？」

続く・・・続くのか？

## せじまつー（前書き）

次はトキか！ラオウか！  
ジョインジョインジョイン

ジョイントトイ

## はじめて

転生。

もし自分が転生できると聞いた時、皆はどう思ひだらうか。  
夢のような世界へ行けることを喜ぶのか。  
不思議な力を得ることに涙するのか。  
それとも、今までの世界から消えることに悲しむのか。

俺か？

俺はもう死ん、喜んだよ。

「本当に俺が転生するのか！？」  
「本當だ。私が嘘をつく意味がない」

急に大きな声を出した俺を呆れた様な目で見る男。  
赤と黒の派手なスーツに身を包んでいた、とにかくこれといつた特徴のない男。

今の状況的に、こいつが神だと思つただが・・・影が薄いな。  
服の派手さに負けてるよ。

「君のような反応をしてくれる方がやりやすい  
「そうなのか？」  
「泣かれたりしたら」「うちも困るんだ。時間がかかるからな  
「確かに」  
「そんなことより、だ。君もわかつてているだろ？·なんの特典も付  
けずに送れる訳がないといふことを」

男がそう言つて、何もない空間から漢字が沢山書かれたスロット  
が出て来た。

「そのスロットを回してくれ。その内容に沿つた特典をあげようぢ  
やないか」

「内容？」

「そうだな・・・例えば『頂肉体』が出たとしよう。その世界での  
人類最強の肉体を手に入れれる。他にもスロットの字次第では架空  
の技や力を手に入れることも出来る」

非常に夢が膨らむ内容だ。

「まあ、全てがスロットの字で決まるから・・・『無能力』なんて  
のが出る」とも

「えつ？・・・え、えつ！？」

「スロットだぞ？スロットは博打だ」

「ちょっとちょっと！特典くれるんじゃないの！？え！？」

「それはまあ、能力がないのが特典になる訳で・・・『超不幸』と

かよりはマシだと思えば

「その『超不幸』とかになつたら Bieber さんの？ Bieber さんのよー！？」

「まあ、運命だと思つてくれ」

と、こうことは・・・弱くてニユーゲームなんて最悪なことも起  
こるかもしれないのか。

・・・もとのせかいにかえりたいよ。

「まだスロットを回してないから落ち込むこともないと想つが

「そうだよね！いいの出るよねー！」

「知らん」

果てしなく不安になる気持ちを抑えて、スロットを・・・回すー。  
何が出るんだ？

聖？聖なる力的な？

帝？聖帝王になるの？

王？聖帝王ってなに？

「良かつたじゃないか。大分良い特典だぞ『聖帝王』は」

「そうなの？」

「ああ、架空の能力をもらう訳だからな」

架空の能力か・・・

聖帝で帝王・・・

ん？んん！？

「もしかして・・・」

「そうだ。あの聖帝だ。・・・格闘ゲーム仕様だがな」

それってどうなの？

喜ぶべきなのか悲しむべきなのか・・・

「微妙な顔をするな。あのゲームのバランスがおかしいだけだ。十分強力だよ」  
「なら強いのか。

良かつたークソみたいな特典じゃなくて！  
いやまあ、病人の方がいいなーとかちょっと思つたりもしたよ。  
でも、十分強いらしいしもう満足だね。

うん。

良かつたークソみたいな特典じゃなくて！！

「良かつたークソみたいな特典じゃなくて！！  
運が良かつたじゃないか

やつぱり声に出して言つべきだね！

「世界は・・・恋姫の世界に行つてもいい

おお！

チート特典で大暴れしてモテモテ生活！  
なんてことも・・・いいじゃないか！

「容姿の設定も聞くが・・・望みはあるか？」

「そこはやっぱり・・・10人中9人が振り向くよつたレベルの容  
姿が欲しいなと」  
「わかった。そうしようじゃないか。」

キテる。  
キテるよー。

俺の時代キテるよ！！

モテモテ生活確定ですね！！

「お前の一やついた顔を見ると何を考えているか手に取るよついでわかるな。まあ、逝つてこい」

「逝つてきます！！」

お父さん、お母さん。  
幸せになつてきます！

世界から、一人、飛び立つた。

前が見えない。

田を開けてないから見える訳がないんだけどね。

「あなた、これが私達の子ですよ」

「おお！お前に似てとても可愛らしい子だ！」

「もう、恥ずかしいことを言わないで下さいよ。」

「本当のことを言って何が悪いというんだ」

「これが俺の孫、か・・・」

「そうですよお父さん。抱いてみます?」

「う、うむ・・・悪くないな・・・」

田を開けると、長身の男が俺を抱きかかえていた。  
齡50といったところか、渋さの漂うその風貌はさながら敏腕ス  
ナイパーのよう。

しかし、その田を真っ赤に腫らしてくしゃくしゃになつたその顔  
は、孫の誕生を喜ぶ爺そのものだつた。

「そうか、孫か・・・こんなに早く見れるなんてな・・・」

「お、お父さん!/?どうしたの!/?」

「いや・・・ちょっと田にゴミが入つただけだ。大丈夫だよ」

「そう・・・お父さん、ありがとうね」

「お前は・・・俺を泣かせたいのか?」

目から涙を溢れさせた俺の爺さんのその横で、俺の親が仲良く笑  
つて見つめていた。  
その笑顔を見ていると、前の親を思い出してしまった。

碌な親孝行もせずに、半ば家出のように一人暮らしを始めた。  
最後に見た両親の顔は、寂しそうに笑っていた。

俺は才能という奴に恵まれていなかつたが、それでも俺の頑張り  
を評価してくれた。

俺が生まれたとき、今の親のように笑っていたのだろうか。  
俺が居ないと知つて、どうするんだろうか。

そんなことを思つと、何かこみ上げてくるものが。

気がついたら、俺は大声で泣いていた。

「お、おいー？ いつたいどうすればいいのだー？」

「お父さん、落ち着いて」

お父さん、お母さん。

『父さん、母さん』。

ここで幸せになります。

## はじまり（後書き）

主人公と両親の名前、どうしたらいいのか・・・  
帝王さんには哀しみを背負つてもらわないといけないし・・・

続け！

せこひがいー（前書き）

短い・・・  
かっこ文太おくれーー！

せいじゅう！

日記を、書いつと思つ。

3歳になり、文字も少しづつだが理解できるようになつてきた。でも、時々日本の文字が恋しくなつてくる。

何故かこの世界は日本語で成り立つてゐるけど、字は漢字ばかりで正直よくわからない。  
だから、日本語で書く。

日本語で書けば見られても理解出来ないだろ？

3歳になつたけど、相変わらず平和だ。

この世界が三国志をモチーフにした世界だと忘れそなぐらい。

そういうえば三国志や恋姫、あと21世紀の科学、兵法の情報とは記憶から「こつそり抜け落ちてたけど未だに記憶が戻らない。  
女がとても強い世界つてことぐらいしか覚えてないけど、神様が  
改变を恐れて何かしたんだろうか？

体が女だったのもびっくりしたけど、女が強い世界なら結果オーライかもしれない。

体も少しづつ、だがしつかりと成長してきている。

と言つても、3歳だから絶世の美女な訳がないけど。

容姿を良くしてもらつたのはハーレムを作りたかったからであつて、男にモテたいからじゃない。

大人になつたら、男からの視線も増えるのだろうか。

・・・想像したくない。

どうせなら精神も女にしてくれば楽だったのに。

神様にもらつた転生特典だけど、全くもつて使えない。

聖帝の力を貰つたけど、それは経験や技術であつて、体を鍛えないと十全に發揮しないものだった。

一度、鍛えようと外に出てボロボロになつて帰つて来た時は両親に泣きつかれたので、もう少し成長するまでは自重しようと思つ。3歳の体で文字を書くのがここまで重労働とは思わなかつた。

8歳になった。

中々に成長したと思つ。

両親も喜んでくれた。

胸は無だけど・・・8歳だから別に大丈夫なはずだ。

流石に8年間もこの体で生きていると、愛着が湧いてくる。しつかりと美しい幼女になつたんじゃないだろうか。

最近、男の子からの視線をよく感じる。

稀に大人の視線も交じつていて少し・・・いや、かなり気色悪い。男には絶対にやらん。

・・・綺麗なお姉さんなら話は別だけど。

6歳から体を鍛え始めたけど、少しずつだけど効果が出る・・・  
と思う。

何故か見た目に表れにくいので、よくわからないが。

ムキムキの8歳幼女になるのも何とも言えないから、善しとしよ  
う。

しかし・・・男口調なのと俺と喧嘩のをやめないと一々両親がうる  
さいのはなんとかならないのか。

まあ、自分の娘が男口調だつたら少々アレだし、現実で俺と言つ  
女は少しイタイような気もしなくはない。

でも、口調を変えると何か自分とは違う気がしてどうも落ち着か  
ない。

特に父がうるさくて・・・そろそろ諦めて欲しい。

俺も、もう15になる。

絶世の美女にかなり近づいたんじゃないだろうか。

背もかなり伸びたし、何よりも男から言い寄られることが日常茶  
飯事になつたことが、大分魅力がでてきた証拠だと思つ。  
男に恋愛感情を抱かないのは相変わらずだけど。

最近、帝王の力に体が追いついてきた。

かなり嬉しい。

でも、まだ体に負担が掛かるようで、全力を出せるようになるの

はまだ先のようだ。

頑張れ、俺。

そろそろ口調のことは諦めてくれてもいいんじゃないだろうか。

## せいかよひー（後書き）

オリキャラ、高順さんしか考えてないんですよー  
出してほしいキャラとか、教えてもらえないかな？（チラツ

## はじめてー（前書き）

私の中二パワーを解放しても、この程度だというのか・・・  
相変わらず文字数が・・・

はじめて！

きょう、はじめてひとをころした。

怖い。

だけど、それ以上に心地良い。

冷静になつたとき、殺人の記憶に苛まれて動けなくなるのかと思つたけど、むしろ、村を守るために殺したこと感謝されたことで、気分が高まつて落ち着かない。

正直、殺しているときは恐怖も躊躇いも何も無かつた。  
そんなもの、感じる訳がなかつた。

村を守るために人を殺す。

今まで人を殺したことのない俺がそう出来たことを、勇気ある行動だと両親に褒められた。

確かにそれは周りから感謝されるに値するものだったのかもしれない。

でも俺は、そんな格好いいことをしたと言える自信はなかつた。  
何故なら、俺は笑つてゐるから。

「賊だー！賊が来たぞー！」  
「なんだつてー！」

突然この村を賊が襲つてきたと聞いたとき、俺は真っ先に出て行

つた。

素手で戦えるのが俺だけで、特に準備するものもなかつたから一足先に賊を見に行つてみた。

むさい。

この賊を表す言葉はそれだけで十分、そう思えるほどの憲苦しい雰囲気だつた。

「アニキ、この村はどんな女が居ますかねえ！」

「お前の頭ン中はそれしかねえのかよ・・・まあ、イイ女がいた方がキモチイイけどな！」

「アニキイ、美味しいもん一杯食えるかな・・・最近、碌な食いもん食つてねえよ・・・」

「メシも女も手に入れて、さつさと帰るぞ。」

男、男、男。

見渡す限りの男。

遊びに行くような口で、男達は喋る。

辛うじて残つてゐる記憶によると女の方が強いみたいだけど、まあそつとも限らないだらうし、何しろ実戦は初めてだから油断はない。

遊びに行くような軽さで村を襲つつことは、それだけ慣れてるのかもしれない。

「くつくつくつ・・・ん？」

俺に気がついたのか、賊の奴らは厭な笑みを浮かべながらくつちに近づいてくる。

「よう嬢ちゃん。迷子にでもなつたのかい？」

「へつへつ・・・・・イイ女じやねえか。これはこの村に期待せざるを得ねえなあ・・・・」

氣色悪い。

俺を厭らしい田で見てくる賊達。

何かが体を這いずるような感覺、嫌悪感。  
この体になつてから、男が苦手になつた。  
この感覺は、全く慣れない。

慣れたい、とも思わないけど。

「お嬢ちやん、おじわん達に何の用かな?もしかして、イイコトしてくれるとか?」

「イイっすねえ!俺、この娘好みっすわ!」

「俺が声を掛けたんだ。もちろん、俺が最初にシテもいひつけえ・・・・・!」

「

欲望に塗れた田を向けられて、理屈の無い精神的苦痛を感じじる。

・・・・・よく我慢してゐ、俺。

「俺は村を守るために此処にこらだナだ。お前達の戯言に付き合つ  
氣はない!」

「なんだあ?正義の味方氣取りつて奴かあ?」

「いやー、カツコイイねえ!おじさん惚れちやいやうだよーでもさ  
あ・・・・武器も何もないくせに、何ができるつて言つただよー・・・・・

苦痛しか生み出さない、耳障りな音が聞こえる。

・・・・よく我慢しだら、俺。

「むづ蹀るな。むせいんだよ、お前ら。わざと死んでくれよ

笑う。

その顔は多分、引きつってるけど。

「クソッ！馬鹿にしゃがって、ヒイヒイ言わしてやるうじやねえかよ！」

一斉に腰に差した武器を取り、襲いかかってくる。

怒りに顔を歪ませた男達が一斉に駆けてくるそれは、中々に面白い光景じゃないだろうか。

「クソがつ！オラアツ！…」

俺がクスリと笑うと、益々顔を赤に染めて、男の剣が振り上げられる。

斬るというよりも潰すことに長けたその剣は、当たれば確実に骨をやられそうだ。

俺は、この状況でも余裕なようだ。

少なくとも、こんなことを悠長に考えれる程には。

その剣は、ひどく遅く視えた。  
その体は、ひどく脆く視えた。

その遅い剣を左手で捌く。

大きな大きな、昂揚感。

初めての実戦なのに、俺の体は何も変わらないらしい。

その脆い体を右手で貫く。

小さな小さな、不快感。

初めての殺人なのに、俺の心はあまり痛まないらしい。

俺が貴いた男は、俺の手から零れるように崩れ落ちた。その体と繋ぐように、俺の右手には糸が引いていた。

「嘘……だろ……」

何かが喋った気がしなくもないけど、どうせ誰も喋らなくなるだろ。

笑う。

「フ……フフ……フハハハハ！」

そのままは多分、笑つてないけど。

アレ？

おかしくない？  
おかしいよね？  
おかしいよね！？

「嘘……だろ……」

なんで、貴いてんだよ。

なんで、死んでんだよ？

「フ・・・フフ・・・・フハハハハ！」

なんで、笑つてんだよ！？

冗談・・・だよな？

人間の体を簡単に貫けるほど、素手は強くないはずだ。腹に一撃入れられたぐらいで、簡単に死なないはずだ。人間は、あんな風には

嗤えないはずだ。

そもそも、こいつは笑つてているのか？

目を見開いたまま、只々笑い声を発し続ける。

狂つたように、笑い続ける。

こいつの口元を聞いているだけで、何かが抜け落ちていくような気がした。

「ひ、ひいいつ！？」

こいつの狂気に錯乱したのか、俺の仲間が一斉にこいつに襲いかかる。

俺たちは、捕食者だ。

民の命を喰らつて生きる。

こいつはこの村の民だから、俺達が襲うのは当たり前のこと。それなのに、俺の体が叫び続ける。

これは、駄目だと。

気がつけば、俺の仲間はもう数えるほどとなつた。

百人は居た俺の仲間は、ほとんどが地に伏していた。  
生きている奴は居るのかと確かめようとして、やめた。  
居るはずが、ないから。

右腕以外何一つ汚れていない死神が、こっちを向いた。  
あまりにも美しく、ずっと見ていたいその姿。  
だけど、俺はこいつを見る訳にはいかない。

俺は、目を逸らした。  
目が合えば、死んでしまう気がして。  
合わなくとも、死ぬけれど。

どうせ死ぬなら、死神は見たくない。

とても強い人に助太刀された、ということにしておいた。

流石に、五分ほどの間に初実戦の俺一人で殺つたことがばれれば、  
恐怖の視線に晒されてしまう。

良くて、異常者扱いか。

悪ければ・・・殺されるかもしない。

苦しい嘘かと思ったけど、以外にすんなりと信じてくれた。

すごく、楽しかった。

体を鍛える努力をしたのは俺だから、この体は俺のもの。  
だけど、体捌きや技、異常ともいえるほどの力は確実に俺自身の  
ものじゃなくて。

転生者の恩恵としてこんな力を使って、まるで物語の主人公にな  
ったような感覚。

人を殺すこと自体が楽しかったのか、自分の力を見せつけるのが  
楽しかったのか。

或いは両方だったのか、俺には分からぬけど。  
でも、楽しかったのは、紛れもない事実。

そんな自分が怖くて。

何故か、心地良かつた。

呼吸がしづらい。

体が痛い。

まだ足りない体で全力を出したから、しばらくは動くことすらで  
きないと思う。

動けない言い訳を考えないと。

明日からの日々を想像して、少しばかり厭になるけど。

笑う。

その口は多分

あとで、はじめてひとをいたしました。

## はじめてー（後書き）

チート能力持つたらやつぱり見せつけたくなると思つんですよー  
私も無想流舞が使えたら移動が楽に・・・

早く哀しみを背負わせないと他キャラが一切出てこない・・・  
陥陣當つていつ出るの??

・・・一話目と繋げるのはまだまだ先になりそう。」

出て欲しい武将とか、感想に書いて頂けると嬉しいです。

苦しいです。評価してください。と書いたらどれぐらいの人人が解つ  
てくれるんだろ???

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5694z/>

---

せいていさんがんばって！

2011年12月20日15時51分発行